

# 原爆文学「古典」再読2——佐多稲子『樹影』報告

松 永 京 子

二〇一五年三月八日(日)、「戦後70年」連続ワークシヨップの一環として、原爆文学「古典」再読ワークシヨップ第二弾が長崎大学にて開催された。本ワークシヨップでは長崎を舞台とした佐多稲子の小説『樹影』(一九七〇年八月から一九七二年四月まで『群像』に掲載)を取り上げ、司会者が佐多稲子の経歴と作品を紹介した後、二人の報告者が具体的な作品論を展開し、最後に全体討論を行った。本特集には、ワークシヨップの発表をもとに書かれた二本の論文——坂口博氏の「福岡千鶴子と醇次郎——鎮魂シヅメの通奏低音」と村上陽子氏の「孤独の諸相——佐多稲子『樹影』によせて」——が収録されている。詳細はそれぞれの論文をご覧くださいたくとして、この報告では、二つの発表と全体討論を振り返りつつ、ワークシヨップを終えの私なりの感想や考えをまとめてみたいと思う。また、同時に、『樹影』を再読することの意義を再確認できればと思っている。

まず、本ワークシヨップを開催するにあたって、なぜ「古典」再読テキストとして『樹影』を取り上げることとなったのかを簡単に記しておきたい。第一弾の井伏鱒二「黒い雨」に続いて、「古典」

再読テキストの候補として挙がったのは、林京子「祭りの場」、井上光晴「西海原子力発電所／輸送」、佐多稲子「樹影」の三点である。開催地が長崎であること、また原爆と原発をつなぐ言説の見直しがなされている今日の現状を考慮したとき、これら三点が候補作としてあがったのは自然なことだったのかもしれない。だが、特に佐多稲子の『樹影』が選ばれたのには(もちろん他の諸事情もあつてのことだが)報告者の一人である坂口博氏の貢献が大きい。『樹影』を提案する理由として、坂口氏は次の二点を指摘している。

(1) 被爆者と非被爆者に表現の相違が見られるか否かを、具体的に検討したい

(2) 原爆に限らない大きな出来事／事件にともなう、当事(当時)者性の問題を検討したい

これらの問題を考えるきっかけとして、『樹影』は最適なテキストであったといえる。「非被爆者」である長崎出身の佐多稲子によつて書かれた『樹影』は、「入市被曝者」である柳慶子と麻田晋を主人公とし、彼女／彼が「被爆者」であることを否定しつつ



も、「原爆症」に対する懸念や畏れから逃れられない様を描き出している。「被爆（曝）者」とは誰なのか、また「被爆（曝）者」はどのように語られているのか、という問いかけは、本作品の主眼とも深く関わっているといえよう。さらに本小説では、外国人入国管理令制度、米ロビキニ水爆実験、原水爆禁止大会、日米新安保条約の強行採決、米英ソの部分核停条約、ベトナム戦争、中国の核実験といった「原爆に限らない大きな出来事／事件」が背景に置かれており、二人の「被曝」体験をより複雑で重層的なものへと深化している。本ワークショップ開催にあたって、こういった問題意識が前提にあったことを、まずは指摘しておきたい。

第一報告者である坂口氏は、『樹影』のなかの「挿話」に注目し、小説中では語られていないものの、「通奏低音として響いている」声を浮き彫りにした。「あの人たち」から「この人たち」へと転換している冒頭部分において、「この人たち」が柳慶子と麻田晋に限定される一方で、「あの人たち」が直接的には「麻田の親友」と長崎の原爆によって死んだ彼の妻を指し、「原爆の死者たち全般」へと拡大していることが指摘された。さらに坂口氏は、その他の小説や随筆に言及しながら、麻田晋と柳慶子の物語を挟み込む形で組み込まれている親友夫婦の物語が、実在した福岡千鶴子と醇次郎の物語であることも明らかにしている。

坂口氏が注目した「語られなかった」人々の存在は、佐多稲子が「語りたかった」、けれども「語ることでできなかった」存在だったのかもしれない。このことは、『樹影』の主人公として作者が、八月九日に即死あるいは直後の死を迎えた「麻田の友人」



司会 松永京子

の妻ではなく、「入市被曝者」である麻田晋と柳慶子を選んだことにも鑑みることができ。麻田と慶子は、作品半ばまで、自分たちは「被曝者ではない」と思い込もうとする。もちろん、二人が「被曝者」であることを否定するのは、自分たちの病気と「原爆症」の関係を認めたくないという情動が働いているからであるが、もう一つの大きな理由として、二人が直接被曝していないという事実があることも見逃せない。例えば麻田は、長崎に原爆が投下された翌日、三菱兵器大橋工場に通っていた甥を探すために爆心地に入っている。このことは、麻田の被曝を裏付ける一方で、麻田の体験が「直接的」ではないということも読者に喚起する。それは次の一行にも明らかだ。

記憶の底にねじ伏せている当時の様相が、一瞬のうちに展がるが、それでも彼の出会った限りの悲惨は一夜明けてのものだ。原爆投下の直後の様相を彼は知らない。(二七四頁)

そしてこの「原爆投下直後の様相を彼は知らない」という事実は、麻田が当時のことを「語らない」事実へと繋がっていく。

麻田晋が、当時のことを語らぬのは、自分が辛いということにちがいないが、それを語れば死者たちを冒瀆するような気もあるからである。(二七四頁)

この文章から、麻田が「語らない」のは、即死した「死者」と直接原爆を体験していない自分との被曝(曝)体験が同じではない、ということに麻田が意識的だったからであると推測できる。「被曝者である」ことを否定する麻田にとって、「被曝者」は原爆に



発題 坂口博

よって即死した「死者たち」であり、「死者たち」を代弁することは、「死者たち」を「冒瀆」する行為でもあったのだ。そして、麻田の「語る」ことに対する懸念は、作家佐多稲子自身の懸念をも反映していた。『樹影』講談社文芸文庫)のあとがき「著者から読者へ——主題と実感の間」のなかで、佐多は以下のように述べている。

苦痛なおもいをしながらもまだこのときまでは、長崎の被曝は私には描けないとおもっていた。描けない、というのは、自分の力不足というだけではなく、被曝というこの重い事実を、自分が負うたのではないのに、どうして描けよう、とおもっていたのである。それを敢えて描くのは、不遜になる、というふうにはさえおもっていた。(三六八頁)

麻田が、即死した「被曝者」に代わって当時を「語る」ことが「死者たちを冒瀆する」と感じていたように、佐多もまた、「非被曝者」である自分が「被曝者」を描くのは「不遜になる」と感じていたのである。このことを考慮したとき、佐多が親友夫婦を直接「語るなかつた」あるいは「語るができなかつた」のは、「死者」を代弁することへの作者の遠慮があつたからだと考えることはできないだろうか。「死者」を代弁することへの作者の「遠慮」は、本作品が一人称ではなく三人称で描かれていることから窺うことができる。

佐多稲子の短編や随筆には、柳慶子と麻田晋のモデル、そして坂口氏が指摘する福岡夫婦をモデルとした作品がある。そしてこれらの作品は(私が知っている限り)すべて一人称で描かれている。

だが、これらの作品のなかで、「語り手」である「私」は「被曝（曝）者」ではない。「語り手」はあくまでも「非被曝者」である。「私」なのであり、「被曝（曝）者」の声は「私」の視点を通して語られるにすぎない。そういった意味においては、「私」の存在が消滅し、「被曝者」が中心におかれた物語である「樹影」は、佐多の他の「原爆作品」とは一線を画しているといえるだろう。

しかし、『樹影』においてさえも、「被曝（曝）者」が決して一人称で「語らない」という点に注目したとき、「被曝（曝）者」に共感しながらも、「被曝（曝）者」として「語る」ことはできないとする、作者の思いを汲み取ることができないのではないだろうか。

第二報告者である村上氏は、先行研究を丹念に整理しつつ、そのなかの論点の一つである孤独の問題に注目した。麻田が「被曝者ではない」という意識から、「被曝者」として孤独を深めていく様子や、慶子が「華僑」としての意識を獲得していく様子を丁寧にみていきながら、二人の孤独は「位相の異なるもの」であること、また二人の孤独が「被曝者」や「華僑」であるということだけでは説明できないことが指摘された。村上氏の発表は、それぞれの「孤独」や「生」の複雑なあり方を提示することで、二人の孤独を取り巻くその他多くの体験や「生」に目を向ける必要があることを教えてくれる。

村上氏の発表に示唆を受けて、ここで少し考えてみたいのは、「孤独」は共有できるのか、という問題である。幾つかの辞書が定義しているように、「孤独」を「ひとりぼっち」、あるいは「精神的なよどころとなる人、心の通じあう人などがなく、さびしいこと」と捉えた場合、共有されないこと自体が「孤独」の特徴ともいえる。



発題 村上陽子

とすれば、「孤独」の共有、という考えそのものが矛盾しているといえるのかもしれない。では、麻田と慶子が共有することのできない「孤独」とは、いったい何であったのか。村上氏が指摘するように、二人の「孤独」には、「事後的に獲得された「被曝者」という当事者性」や「華僑」としての政治性が関わっているが、そもそも二人をつなげるきっかけとなったのは、「被曝者」という当事者性の意識を高めることとなった二人の病であり、慶子が「華僑」であるという事実だった。慶子が経営する茉莉花の開店にあたって、設計者として関わる麻田は、最初、慶子の苗字「柳」を「やなぎ」と読むべきかあるいは「りゅう」と読むべきかと問い、慶子はそれを「ちよつとうるさい」（二四頁）と思う。しかし、仕事を一緒に進めていくにあたって、それが「勝手な対抗意識」であったと慶子は思うようになり、さらに仕事仲間として彼女を対等に扱う麻田に対して「二十七の女のゆらぐ感情」（二七頁）をもつようになっていく。

柳慶子にとって麻田晋は、彼女の生活の中であつて出合わなかった型の間人であつた。慶子は、男からこれほどいわけは対等に接しられたこともなかったようだ。女感覚にだけははつきり感じられる男というものの、女に対する男くさい優越を麻田は持つていなかった。それは慶子の女らしい感じ方と同時に、華僑としての潜在意識を刺戟されないということでもあつたのはたしかである。（一七頁）

ここで注目したいのは、慶子が麻田に惹かれていく理由として、

麻田が「華僑としての潜在意識を刺戟」しない点が挙げられている点である。慶子は「女性」であり「華僑」である彼女を対等に扱う麻田に惹かれていく。しかし、麻田が「君は、華僑、華僑と云う必要はないよ」（一〇〇頁）というとき、二人の認識にずれがあることに気がつく。慶子が「華僑」であるという事実は、二人を繋げる役割を果たしながらも、二人を引き離す要因ともなっているのである。

「事後的に獲得された『被爆者』という意識についてもまた、同様のことがいえる。二人の交流は、肺浸潤という病気をわずらい、病院帰りの時間をともに過ごすことによって深まっていく。

しかし、「二人の病気が同じ」（三五頁）という事実が二人を近づける一方で、「被爆者である」かもしれないという不安は、二人の「入市被曝者」としての経験に差異があることの自覚へとつながっていく。「君が、原子病になるくらいなら、とつくにその前に、僕がなつとるよ」（三三八頁）という麻田の言葉や、「中心地に入つたて云うても、あたしはたつた一度往復しただけやから」（二三九頁）という慶子の言葉には、「入市被曝者」としての彼の経験が一樣ではないこと、またそれぞれの身体が病に冒されていく様にもずれがあることが示されている。このように考えたとき、慶子と麻田の「孤独」は単純に「共有されぬ」のではなく、何かを共有しながらも完全には共有できない、という感覚に依拠していたのではないかと思えるのである。

「孤独」は共有できるのかという問題を、「原爆」の経験は共有できるのかという問題へと広げて考えてみたい。広島や長崎において「被爆（曝）者」は、直接的であれ間接的であれ、「原爆に遭つ

た」という共通点をもつ。しかし、「原爆に遭つた」という経験を一括りにすることはできない。なぜなら、一人一人の「被爆（曝）」前と「被爆（曝）」後の生き方が決して同じではないように、個々の「原爆」体験もまた、全く同じではないからだ。麻田と慶子の「孤独」の背景には、「被爆者」であれ「非被爆者」であれ、「被爆（曝）」体験は共有することができない、という前提がおかれている。「被爆（曝）」体験や「孤独」は共有されない。だが、共感することはできる。共有されない体験を共感しようとする。この点に、『樹影』作品を読む意義が見出せるのではないだろうか。

参加者全体の討論では、多くの示唆的な質疑があった。残念ながらここで全てを取り上げることができないが、幾つかを紹介しつつ、私なりの見解をまとめてみたいと思う。

まず、「ながさき」表記が用いられているのはなぜか、という質問について。「ながさき」という平仮名表記は、作品の後半で、被爆者の健康診断をおこなった慶子が「自分も「ながさき」のひとりという実感をはつきり持ったような気がした」（三〇〇頁）と思う場面で用いられている。この質問に対して、「ヒロシマ」を意識していたのかもしれないという意見や、慶子が華僑であるということも関連しているだろうという意見があった。

この「ながさき」表記については、ワークシヨップ後、他の作品でも使われていたのではないかと思い、幾つかの佐多作品を調べてみた。その結果、自伝的小説『時に佇つ』（『文藝』に連載、一九七五年）や短編『仕合せと命』（初出『婦人画報』一九五五年八月）などにも使われていることがわかった。「そこが私自身の

故郷であり、ながさきだから」（『時に佇つ』一一七頁）、「私の故郷の長崎では、自分たちのことを長崎人、つまり、ながさきじん」という（「仕合せと命と」一八九頁）といった文章のなかで用いられているように、どうやら「ながさき」は、「故郷」としての長崎を喚起するものとして用いられているようだ。慶子が被爆者の健康診断で、「自分も「ながさき」のひとり」であると感ずるとき、被爆者の体験は故郷の体験でもあるという思いも含まれていたのかもしれない。

「麻田の家族の描き方」についても、多くの質問がなされた。例えば、麻田の妻である邦子。「邦子を切り捨ててもよいものだろうか」という邦子の描かれ方に批判的な先行研究に言及して、「麻田晋の妻邦子の存在をどう捉えるか」という質問があった。それに対しては、邦子は作品中であまり言及されていないものの、その存在は不気味なくらい大きいこと、また慶子よりも邦子のほうが作者の境遇と重なっている点が多いことから、あえて自分に近い邦子については描かなかった作者の意図を読み取る必要がある、という指摘があった。

作品のなかで邦子は、「もうひとりの不幸な女」（二八九頁）として描かれる一方で、麻田の遺体解剖の承諾をしたり麻田の遺作を売ったりする権利を持つており、妻として法的な力をもった存在として描かれている。だが、邦子に関してもっとも私の印象に残っているのは、慶子の葬式の焼香の列に並ぶ姿である。「邦子の今の胸にあるおもいは何であつたらう」（三六四頁）と書かれているように、邦子の本当の気持ちは誰にもわからない。だが、そこにひとつの「生」が存在していることは無視することはでき

ないし、邦子に共感することで、またもうひとつの違った物語がみえてくるのではないかと思う。

「語られない」物語を読むという意味では、「被爆していない麻田の弟の役割」についての質疑も示唆的であった。小説の最後で「そんな二人をとにかくいちばん知っているのは麻田の弟であつたらう」（三六四頁）という一文があるように、麻田の弟は麻田と慶子のどちらとも親しい。麻田が死ぬ直前に絵を描いていたのを唯一知っていたのは麻田の弟であつたし、麻田の死後、D展に出品された麻田の絵を見るために、慶子と上京したのも彼であつた。すなわち、慶子の知らない麻田、麻田の知らない慶子を知っていたのが、麻田の弟だつたのである。それほど重要な人物であるにもかかわらず、彼には名前が与えられていない。麻田の弟は誰だつたのか、彼の「生」は何を語っているのか。

麻田の弟のモデルと思われる人物が、短編「落葉」（初出『群像』一九六九年一月）に挿入されている。慶子のモデルともいえる「茶房の女主人」の墓の前に、「ピラ撒きまでも良かつたのですよ」（二〇五頁）と述べる「私の友人」である。「樹影」のなかでも、麻田の弟が「ピラ入れまでもよかつたらう」（三六四頁）と心のなかで思う場面がある。『樹影』の最後は、麻田の弟が慶子の墓の前に読経を聞く場面が終わっているが、この場面は「落葉」と似通つていながらも、重要な点において異なっている。「落葉」の「私の友人」と『樹影』の麻田の弟はどちらも、「茶房の女主人」あるいは慶子の墓の前に、彼女が「無理をしていた」あるいは「意地を張っていた」と「苛立つおもい」を抱えているという点で共通している。だが、一方はそのまま終わり、もう一方はその気持ちに変

化が生じている。以下は、「落葉」からの文章である。

ピラ撒きなどせんでもよかった、と、この友人の云ったことは、まるつきり当てはずれてはならないのかもしれない。が、生きていたときの彼女にそれを言うならば、彼女は一層、逸つたのであろう。げんに、そうだったのであろう。私はそれが私にも辛くかえってくるのを感じた。(二一四頁)

このように「落葉」では、「私の友人」の言葉のあと、「私」の視点が挿入されているのだが、『樹影』では、「私」の視点が挿入される代わりに、麻田の弟の気持ちに変化が生じている。

彼はその位置から、参列の華僑たちを感じその中で、柳慶子はやはり中国人であつた、とおもいはじめていた。最も長崎人らしかった慶子だが、やはり彼女は中国人であつた、とそうおもふと彼の苛立ちが沈んでいく。柳慶子に対して自分の何をいう立場があろう、という気もしてくるのだ。(三六五頁)

「落葉」では、台湾政府外務大臣来日阻止の闘争として「茶房の女主人」がピラ撒きをしたことに対して、「無理をしていた」という「私の友人」の思ひは変わらない。だが、『樹影』においては、「自分の何をいう立場があろう」と、慶子が無理をしていたことを攻める態度から、慶子と自分の立場が違うという自覚に至っている。この麻田の弟の気持ちの変化は何を意味しているのだろうか。麻田の弟の語る言葉は少ない。しかし、ともすれば周囲との隔たりを深めていく傾向にあつた麻田と慶子の関係をより理解するためには、二人に一番近かつた弟が二人をどのようにみていたのか、ということも注目されるべきなのかもしれない。

他には、「墓参が繰り返して出でくるが、小説の時間構造をどう

とらえるか」という質問があつた。『樹影』では、孟蘭盆や清明節の際、福建省出身の父秦明を連れ立つて慶子が墓参りをする場面が繰り返して描かれている。長崎に原爆が投下された八月九日が繰り返して戻ってくるように、新地の華僑にとつて重要な年中行事も、毎年繰り返されるのである。本小説が戦後三年目の夏からはじまり、戦後二十二年目の十一月に終わることを考えると、はっきりとした円環的な時間構造があるとはいえないかもしれない。

しかし、作品の最後の場面が、「港と街をはさんで、麻田の墓と正面に向きあう位置」(三六四頁)にある、慶子の墓が置かれる「唐人墓地」であるというのは象徴的だ。そこにはまだ、八月九日の爆風で倒れた巨大な石碑が倒れたままになっており、「あの一瞬の事実を二十二年間持続して見せている」(三六六頁)。しかも、石碑のおもてには、「ひび割れの線が一本」(三六六頁)入っている。八月九日の爆風以降、倒れたままにされてきたこの「唐人墓地」の石碑は、孟蘭盆や清明節、あるいは新地の華僑の人々の葬儀が行われるたびに、その存在を知らしめる。そして、原爆以前にも、人々の生活が営まれていたことを主張するのである。

最後に、「むごたらしい被爆の様子が描かれていないことをどうとらえるか」という質問について考えてみたい。この質問については、まず、「むごたらしい被爆の様子が描かれていない」という捉え方と、「むごたらしい被爆の様子が描かれている」という捉え方に分かれる。小田切秀雄が「解説」のなかで、「画家が親類の少年を探して歩きまわるといふ場面で、原爆のすさまじさそのものをこの作家は想像力で描いて迫真の表現になっている」(三八〇—三八一頁)と述べているように、おそらくは麻田のこ

の体験を「むごたらしい」と捉えるかどうかによるだろう。先にも指摘したように、麻田は原爆投下翌日に爆心地に入ったため、「直後の様相を彼は知らない」（一七四頁）。だが、「坐したまま真黒に焼けてようやく男らしいとだけ判別される」屍体、「全身焼けただれてキューピー人形のようにふくれた屍体」、「唇が裂けて異様に面変わりした女」、「母の死体のそばに小さな子の死体」など、麻田の出会った「悲惨」は描かれている（一七二—一七三頁）。麻田の出会った「悲惨」に、「原爆のすさまじさ」を読み取ることは可能だろう。だが、ここでもっとも興味深いのは、多くの人間の屍体に出会いながら、麻田の目を引いたのが、市内電車の割れ残りのガラスにびたりと張り付いた「小さな蛙の死骸」（一七二頁）だったことだ。注意を払わなければ決して気づくことのないであろう「蛙の死骸」。作者はなぜこのような場面を挿入したのだろうか。「むごたらしさ」を前景化することで、ともすれば見過ごされてしまう「死」、このことに作者が意識的だったと解釈するのは、穿ち過ぎだろうか。

全体討論では他にも、「作品に佐多の戦争責任の問題の影をとらえることができるか」、「『黒い雨』と比較した場合に、作品の評価や表現をどう考えるか」といった質問があり、活発な意見交換が行われた。

振り返ってみると、『樹影』の再読ワークショップを長崎大学で開催できたことには、それなりに感慨深いものがあった。周知のとおり、長崎市諏訪公園内には「樹影」文学碑が建てられている。一九八五年十二月一日に建立されたこの記念碑には、本ワークショップでも繰り返し言及された『樹影』の冒頭部分が刻まれている。

あの人たちは

何も語らなかつただろうか

あの人たちは 本当に

何も語らなかつただろうか

あの人たちは

たしかに饒舌ではなかつた

それは あの人たちの

人柄に先ず よつていた

佐多稲子は随筆「小さい山と椿の花」（初出『群像』一九八六年一〇月）のなかで、「樹影」の碑の企画に初めからすべてに推進の役を負ってくれた」のは長崎大学の教授「Hさん」であったと述べている（二三八頁）。「樹影」の碑が建てられてから約三〇年後、「Hさん」が勤めていた長崎大学という場所でのワークショップが行われたことに、何かの「縁」があつたのだと思いたい。

石碑に刻まれた言葉は、本ワークショップの議論でも大きく取り上げられた。本特集が、石碑に刻まれた言葉の意味、そして刻まれなかつた言葉の意味を考えるきっかけとなることを願って、本報告の締めくくりとしたいと思う。

## 引用文献

- 佐多稲子「仕合せと命と」『私の長崎地図』講談社文芸文庫、二〇二二年。  
佐多稲子「樹影」講談社文芸文庫、二〇二二年。  
佐多稲子「小さい山と椿の花」『私の長崎地図』講談社文芸文庫、二〇二二年。  
佐多稲子「時に佇つ」講談社文芸文庫、一九九二年。  
佐多稲子「落葉」『私の長崎地図』講談社文芸文庫、二〇二二年。